

天声人語

「10連休中は猫の手も借りたくらいです」。にぎわいが続く岐阜県関市の「道の駅平成」で、うれしい悲鳴を聞いた。連日、遠来の客たちが「平成ランメン」や「平成弁当」を食べ、「平成したいけ」「平成メモ帳」を買う▼30年前、平成に変わった直後、地元は混乱を極めた。わずか9戸の旧武儀町・平成地区に日に何百台も車が押し寄せ、慣れない交通渋滞が起きた。平成の地名の入った標識が盗まれたこともある▼平成ブームは数年で去った。しかし生前退位の準備が進んだ昨秋、再び観光の大波が戻る。「平成のうちに平成に行っておこうと思う方々がこれほど多いとは。私たちに観光立村の機会を与えてくれた平成時代は、宝物のようです」。道の駅の店員は笑顔で話す▼ふりかえれば、昭和の最後の日々は様相が違った。天皇の病状悪化とともに、企業や自治体行事を中止する動きが広まり、学校の運動会も延期に。デパートの売り場から「赤飯」が消えた。あの当時の行き過ぎた自粛の空気を思い出すと、いまでも胸が苦しくなる▼大正も明治も、ほぼ昭和と同じような最後を迎えていた。当時の本紙の紙面を繰ると、「御不良」「御危険」と容体報道が続く。演劇や歌舞伎など歌舞音曲のたぐいは自粛されたようである▼私たちがいま目撃しているのは、近代史にもまれな、過度の自粛を伴わぬ「代替わり」である。「道の駅平成」を訪ね、平成最後の日々をまるで歳末のように楽しむ姿が、何とも新鮮に思われた。

2019・4・30